う疑問がすこし感じられた。しかし，第六章に至り，その疑問は氷解し，本書の構成の巧みさを感じるようになった。従来のオーソドックスな民族誌だったら，第五章は「パト村の宗教」になり，第六章は「パト村の社会関係と親族」という平板な題目が付いていたのかもしれない。そうではなく，「第五章　祈りの世界のサパララン」というタイトルの下に，幸運を探しに移民に出る村びとの宗教生活を「友だち」という不可視の霊的存在も含めて鮮やかに描き出し，そして「第六章　ブオタン精神がつなぐ移民と村の人びと」では「つながり」という視点から移民と家族との関係を論じている。本書はまさに全体論的な視座から豊富な事例を使ってパト村の移民の多様な姿を描くことに成功している。

本書全体を通して残念な点は，上記のような長所が最後まで首尾一貫して守られていないことである。第七章は「複ゲーム状況」という分析の枠組みのなかに押し込まれて議論が進んでいるように感じられるし，すこし議論が平板だという印象を受ける。もちろん「複ゲーム状況」という概念自体の有効性をここで否定するわけではないが，本書を通していたトーンが，この章ですこし乱れているのは確かである。また，「図7・1　村出身者の間にみられる富の量と富の分配範囲の相関」（p. 285）という図とその説明は，別の意味ですこし不満に感じる点である。社会的・経済的に成功し都市の郊外に住むアレヒンを「分配範囲が狭い」一人に位置付けている。もちろん，ある時点で固定して，人びとの関係性や富の分配を把握するという意味では，この図のような分析手法は妥当である。しかし，より動態的にみていけば，アレヒンはパト村という社会空間を離れ，村とは異なる都市郊外という空間のなかで，それに見合った社会関係を築き，またパナイ島出身の妻方の親族との間にはじゅうぶんに「分け与え」が認められる。本書は人の移動の研究である以上，パト村という定点にこだわり過ぎることなく，より柔軟に次から次へと人が移動先で築きあげる多様な「つながり」にも，それ相応の注意を払って調査研究を進めることこそ，著者が主張する「幸運探し」の実態に合っているように考えられる。「パト村中心主義」と呼べるようなことは，著者による長年にわたってフィールドに深く入り込み，村出身者との間にラポールを築き上げてきた調査の些細な問題点ともいえるかもしれない。

（小池　誠・桃山学院大学国際教養学部）

参考文献

小池　誠．2019.「台湾の高齢者介護を支えるインドネシア人移住労働者」『比較家族史研究』33: 56–79.

杉島敬志（編）．2014.『複ゲーム状況の人類学――東南アジアにおける構想と実践』東京：風響社.

増原綾子；鈴木絢女；片岡　樹；宮脇聡史；古屋博子.『はじめての東南アジア政治』有斐閣，2018，xxi+302p.

本稿では，はじめに本書の概要と特徴，そして東南アジア政治の入門書的書籍としての本書の強みを述べ，続いて本書の構成を概観する。最後に，本書の強みと対を成す本書の弱みについて評者の考えを述べたい。

本書は有斐閣のテキスト・シリーズ「有斐閣ストゥディア」から出版された，「大学に入って初めて東南アジア政治を学ぶ学生を主な読者としてつくられたテキスト」（p. i）である。本書の狙いは，東南アジア政治についてほぼ知る機会のなかった読者に理解を深めてもらうことであり（p. iv），また，読者が本書を批判的に読むことで多様な視点から東南アジア政治を考察すること（p. iv），東南アジア政治の面白さに気づいてくれる読者が出てくること（p. 289）を期待する。本書の著者たちはいずれも中堅の東南アジア研究者であり，その研究対象地域はインドネシア，マレーシア，タイ，フィリピン，ベトナムと幅広い。またそれぞれが地域研究だけでなく他の学問分野（比較政治学，文化人類学，宗教社会学，国際関係論）にも精通している。多様な地域的・学問的背景をもつ著者たちによる本書は，以下にみるように，東南アジア政治に対する幅広い視点を読者に提供している。

本書の大きな特徴は2つある。第一の特徴は，東南アジア政治を3つの視点から説明する点にある。これまでに出版された東南アジア政治の入門書的書籍には，主に3つのタイプがあるが，本書はどのタイプにも属していない。第一のタイプは，地域研究的な視点から，東南アジア諸国の政治に概ね共通するテーマ（伝統的王国，植民地化，国民国家建設，地域統合など）を各国の事例を引きつつ説明する書籍である［山本他 1999；中野他 2016；岩崎 2017］。第二のタイプは，これもやはり地域研究的な視点から，東南アジア諸国の政治史を国別に説明した書籍である［清水他 2018］。そして第三のタイプは，比較政治学の視点から，東南アジア諸国の特徴を政治学的テーマ（政治体制，司法制度，政軍関係，市民社会など）に沿って国家間で比較・分析した書籍である［中村 2012］。また第一のタイプと第三のタイプが組み合わされた書籍もある［山本 2017］。

本書は，上記の3タイプの特徴を全て併せ持つテキストである。すなわち，第I部では主に地域研究的な視点から，東南アジアの現代政治史を国別に紹介し，第II部では比較政治の観点から，各国の政治的特徴をテーマ別（詳細後述）に比較・分析し，第III部では再び地域研究的な視点から，国際政治に関連して東南アジア諸国にほぼ共通するテーマ（詳細後述）を，特に関係が深い国の事例を引きつつ説明している。

本書は上記3つの視点（各国政治史，比較政治，国際政治）から見た東南アジア政治を300ページ強のテキストにコンパクトにまとめている。終章を除き，各章の分量はおおよそ20ページである。本来3冊分に匹敵する内容を1冊のテキストにおさめるのは容易ではない。東南アジア政治に関するどのような情報・知識をどこまで読者に伝えるのか，また，どのように説明するのかを相当に吟味しなければならない。紙面の都合や本書の目的との整合性のため，やむなく掲載を断念した項目もあるだろう。本書の「読者に何を，どこまで，どのように伝えるか」の基準は一貫しており，著者どうしで合意した掲載基準を徹底して守っていることがうかがえる。著者たちの精励刻苦が伝わってくる。

本書の第二の特徴は理解容易性である。本書は非常に読みやすい。冒頭で述べたように，本書の主な読者対象は東南アジア政治を初めて学ぶ学部生である。本書の著者たちは，それまで東南アジア政治についてほぼ知る機会のなかった読者にいかに明確に，わかりやすく，東南アジア政治の特徴を伝えるかに細心の注意を払っている。

また本書は学生だけでなく，大学で東南アジア関連の授業を担当する大学教員にとっても使い易いテキストである。日本の大学ではおそらく多くの場合，東南アジア政治は地域研究的要素の強い「東南アジア概論」や「アジア概論」，あるいは政治学的要素の強い「比較政治」や「国際関係論」といった科目のなかで扱われ，全15回の講義の一部あるいはメインとなる。地域研究系，政治学系のいずれの科目であっても，本書を読めば，東南アジア政治に関する数回分の授業をどのように進めればよいか，レジュメとスライド資料をどのように作ればいいかが容易に想像できる。

たとえば各章の内容はおおよそ講義1–2回分の分量であり，また，各章の最初のページにある枠囲いのIntroductionは講義の初めに述べる「今日の講義のポイント」として利用することができる。本文はできる限り平易な文章で書かれているため，講義用にさらに平易な言葉遣いに直す必要がほとんどない。また章内に適宜配置されたColumnは，その章のテーマ（＝その週の講義テーマ）に関連する東南アジア研究あるいは政治学の重要なキーワードを簡潔に説明している（例えば華僑・華人，巡礼圏，政治体制を測る指標など）。さらに各章の最後には「読書案内」として参考文献が付され，各文献の短い説明文もついている。本書には他にも授業準備に必要な情報が各章に的確に，かつ簡潔に詰め込まれている。教員にとって非常に親切に設計されたテキストといえる。本書をベースにすれば，授業準備のための時間と労力を大幅に軽減することができるだろう。

以上の2つの特徴は，本書が学生に対する効果的かつ効率的な知識提供に長けたテキストであることを示している。しかし同時に，これらの特徴は良質な知識提供型テキストゆえの落とし穴をも内包している。落とし穴とは何か。これについて

論じる前に，まずは本書の構成を確認しておきたい。

本書は三部構成であり，第I部（第1～7章）は各国政治史である。第1章では国民国家以前の東南アジアにほぼ共通する政治的特徴がテーマ別（前近代国家，植民地化，ナショナリズム，脱植民地化）に概説され，第2章から第7章では植民地時代以降（タイの場合は絶対王政下の近代化以降）の各国政治史が国ごとに紹介されている。第2章はマレーシア，シンガポール，ブルネイ，第3章はフィリピン，第4章はインドネシアと東ティモール，第5章はタイ，第6章はミャンマー，第7章はベトナム，ラオス，カンボジアである。

第II部（第8～11章）は比較政治である。国民国家建設（第8章），政治体制と体制変動（第9章），経済成長と分配（第10章），民主主義（第11章）という4つの政治学的テーマを軸として，東南アジア各国の政治的特徴と諸課題が整理されている。たとえば第9章では，政治体制と体制変動に関する下位テーマとして，民主主義と権威主義，権威主義体制の支配の仕組み，権威主義体制における国家と国民の関係，政治体制の持続と変動などが設けられ，これらの下位テーマに沿って各国の特徴や共通点，相違点が整理されている。

第III部（第12～14章）は国際政治である。第12章では国際政治の中の東南アジアに焦点が当てられ，冷戦期およびポスト冷戦期の東南アジア各国の対米・対中・対ソ関係が主に説明されている。第13章では，ASEANを中心とする東南アジアの経済統合の過程と政治統合をめぐる課題が整理されている。第14章では人の移動と政治をめぐる諸課題（越境する不法活動，国際労働移民，人身取引，難民など）が各国の状況を示しつつ指摘されている。そして終章では，日本と東南アジアの関係史が述べられ，現在そして今後の日本と東南アジアの関係にも目が向けられている。

以上に見るように，本書の内容は非常に多岐にわたる。本書はこれらの内容を明解かつコンパクトにまとめており，読者は各章のポイントをほぼ読解の苦労なく掴むことができる。これは本書の強みであると同時に，以下の2点において，本書の弱みにもなっている。

一つ目は，本書の明解さの裏側にある，読者自らが解釈する余地の少なさである。本書は基本的に情報・知識伝達型のテキストであり，実際に起きた出来事を中心にまとめられている。ゆえに，特定のテーマに沿って答えがひとつではない議論や答えることが容易ではない課題を章ごとに示し，読者に自分の力で考える機会を提供するタイプのテキストではない。また，読者が本書の説明を「なるほど，そうなのか」と鵜呑みにせず，「いや，待てよ。この説明でいいのか？」と直感的に問うことは，その明解さゆえに難しい。本書は東南アジア政治に関する学生の理解を促すことはできても，学生の考える力や批判的に読む力を促すには少々不十分である。教員が本書を授業で使用する場合には，本書の内容をただそのまま講義するのではなく，学生が別の議論の仕方や別の視点があることにも気づくことができるよう上手くナビゲートする必要がある。

二つ目は，多様な内容をコンパクトにまとめたがゆえに，本書から東南アジア政治のある側面が抜け落ちたことである。それは「人の顔」である。本書に登場する東南アジア各国の主要な政治アクターは，その名前や実施した政策，歴史的に重要な活動については述べられているものの，他方で，彼らが一体どのような人物なのか，どのような環境に育ち，どのような思想を持つに至ったのかについては触れられていない。おそらくページ数の都合によるものであろう。しかしそのために，残念ながら本書を読んでも東南アジアの政治指導者たちを具体的にイメージすることができない。

読者が何をもって東南アジア政治の面白さに気づくかは人それぞれであるが，東南アジアの「人」に興味をもつというのも，一つのきっかけになり得るだろう。評者はまさに「人」への興味から東南アジア政治研究の門をたたいた。もちろん本書は十分に魅力的なテキストである。しかし，その内容のコンパクトさゆえに，読者が東南アジア政治研究の面白さに気づくきっかけのひとつを失っているように思えてならない。

また，本書からは著者たちの「研究者」としての顔が見えてこない。本書から見えてくる著者たちの顔は，大学生に東南アジア政治を教える真摯

な「教育者」としての顔である。しかし著者たちは大学の教壇に立つ教員であると同時に研究者でもある。それぞれの著者はいま東南アジア政治のどういった事象に興味があり，どのような政治・社会課題について熟考しているのか。現在の事象に対してどのような考えをもっているのか。これが見えてこない。

これまでに出版された東南アジア政治の入門書的書籍においては，各章の最後の段落になると「研究者」としての著者が顔をのぞかせ，著者自身の考えや意見，研究動向への期待，自身の今後の研究姿勢や研究課題への言及がみられる。しかし本書の場合，各章の最後の段落は，章のまとめとして客観的・俯瞰的な文章で締め括られることが多い。明らかに著者個人の志向が述べられた章は，「ASEAN各国が，（中略）国際政治における重要なアクターとして存在感を発揮しうるか，注視したい」（p. 236）という言葉で締め括られた第12章のみである。

読者である学生たちが東南アジア政治を「習う」のではなく，「興味をもって，自分で調べて，考える」ようになるには，これまで東南アジア政治についてまさに自分で調べて考えてきた「研究者（＝実践者）」である著者たちが，なぜ自分は東南アジア政治に興味を持ったのか，東南アジア政治から世界の何が見えてくるのか，についてもう少し自身の考えや意見を読者に伝えてもよかったのではないかと思う。欲を言えば，本書の最後のページにある「おわりに」で，もう少し著者たち自身の声を聴きたかった。

もちろん，どのような教科書でも掲載できる知識や情報の量には限界がある。学部教育の場合，その限界を補う方法の一つが講義であろう。おそらく著者たちは，本書を講義に使用する際には，東南アジア政治の面白さや自ら調べ考えることの意義については口頭で学生に伝えるものと思われる。そしてその役割は，本書を授業に使用するであろう他の東南アジア研究者たちにも期待されているように思われる。東南アジア政治に興味を持つ学生を増やすことは，著者たちだけのミッションではなく，東南アジア政治研究者全体のミッションである。自戒の念も込めて，大学の授業は情報・知識の伝達に工夫を凝らすだけでなく，教員が研究者としての生の姿も多少晒しながら，自らの経験や考えも交えて講義テーマの面白さや意義を多角的に伝えることが肝要なのではないかと本書を読んで感じた。本書のおかげで短縮できる授業準備の時間を，テーマそのものの面白さや，自ら探求することの意義をいかに学生に伝えるかを考えるために充てたいと感じた次第である。

（森下明子・立命館大学国際関係学部）

参考文献

岩崎育夫．2017．『入門　東南アジア近現代史』東京：講談社．

中村正志（編）．2012．『東南アジアの比較政治学』千葉：日本貿易振興会アジア経済研究所．

中野亜里；遠藤　聡；小高　泰；玉置充子；増原綾子．2016．『入門　東南アジア現代政治史』（改訂版）東京：福村出版．

清水一史；田村慶子；横山豪志（編著）．2018．『東南アジア現代政治入門』（改訂版）東京：ミネルヴァ書房．

山本信人（監修・編著）．2017．『東南アジア地域研究入門3　政治』東京：慶應義塾大学出版会．

山本信人；高埜　健；金子芳樹；中野亜里；板谷大世．1999．『東南アジア政治学――地域・国家・社会・ヒトの重層的ダイナミズム』（補訂版）東京：成文堂．

速水洋子（編著）．『東南アジアにおけるケアの潜在力――生のつながりの実践』京都大学学術出版会，2019，ix+586p.

本書の特筆すべき点は，ケアのグローバル化が進展するなかで先進諸国が所与としてきたケア供給源におけるケアを具体的に論じたことである。海外人材の受入に対して閉鎖的とされてきた日本も，2008年から東南アジア3カ国より介護人材を受け入れてきた。経済連携協定（EPA）や技能実習制度，留学ビザでの人材導入に加えて，2019年には在留資格「介護」や特定技能制度も創設され